第 19 回古代武器研究会ポスターセッション（2023.12.16–17）

「盾形銅鏡」の系譜―行燈山古墳・津堂城山古墳出土銅板の再評価―

橋本達也（鹿児島大学 総合研究博物館）

富雄丸山古墳の盾形銅鏡は前例のない特殊品として注目されているが、「前例がない」には再検討を要する資料がある。それは**行燈山古墳で 1865 年の修陵の際に出土した銅板**である。この銅板は今尾文昭によって A 面は仿製内行花文鏡に方格規矩鏡の文様を組み合わせた文様、B 面は鼉龍文鏡にみられる半円方帯の方形部分をデフォルメした文様と指摘され、その後異論は現れていない（今尾 1988）。

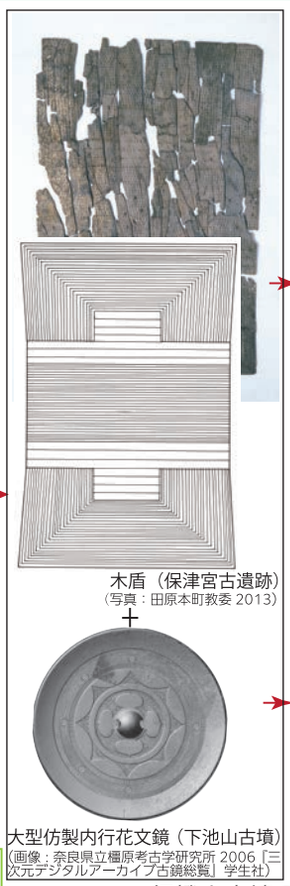
まず A 面は、内行花文の周囲に L 以外の T・V などの文様はなく、方格規矩文を見出すには無理がある。これまで銅板を横向きに置いて文様が判読されてきたが、銅板を縦長においた場合、内行花文以外の文様は木盾の矩形対称文とみることができる。すなわち A 面は木盾と内行花文鏡の組合せなのである。長方形の外形も木盾の形状として理解できる。また縦に置くと内行花文も中軸線で割り付けられていることが理解できる。B 面の文様を明確に示すことは難しいが、A 面の盾形銅鏡をシンボリックに 4 面並列したものとの解釈を提示しておきたい。

また破片資料であるが津堂城山古墳出土の方形銅板と行燈山古墳銅板の関連性については樋口清之（樋口 1927）・加藤一郎（加藤 2013）の指摘があり、加藤は盾との関係について注意を払っていた。この**津堂城山古墳の銅板**もあらためて「盾形銅鏡」の可能性が指摘できる。以上、「盾形銅鏡」は古墳時代前期前葉段階から政権のシンボルとして成立していた、鏡と盾の呪力を一体化させた銅製品であることを指摘したい。

（写真：大阪府立近つ飛鳥博物館 2014『箸墓以降』）　A 面

90° 回転・縦置

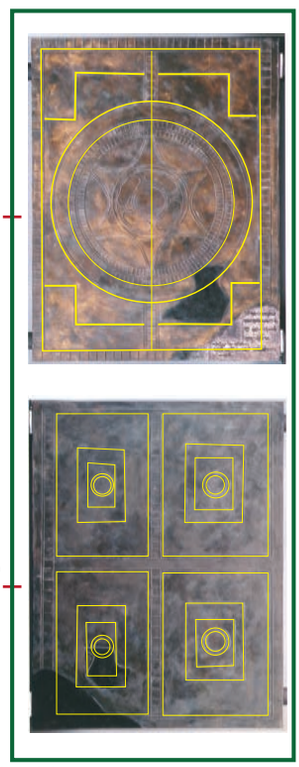
B 面



木盾（保津宮古遺跡）
（写真：田原本町教委 2013）

大型仿製内行花文鏡（下池山古墳）
（画像：奈良県立橿原考古学研究所 2006『三次元デジタルアーカイブ古鏡総覧』学生社）

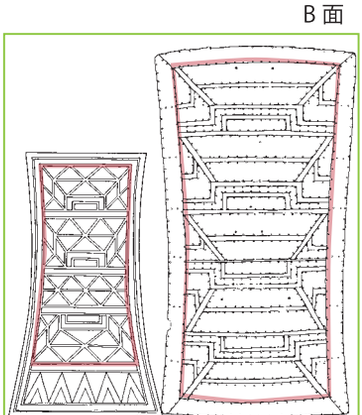
行燈山古墳の盾・銅鏡一体型銅製品（「盾形銅鏡」）



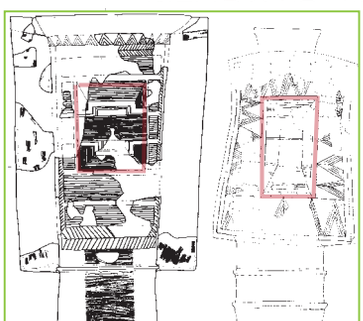
70.0×53.8 cm

（奈良市教育委員会 2023『富雄丸山古墳の発掘調査―第 6 次―』）
64×31 cm
富雄丸山古墳の盾形銅鏡

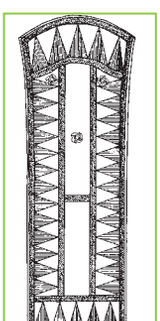
（加藤一郎ほか 2013『津堂城山古墳』藤井寺市教育委員会）
左下：15×8 cm
津堂城山古墳の方形・円形銅板



桜塚狐塚古墳革盾　石上神宮鉄盾



黄金塚 2 号墳盾形埴輪　土師ノ里遺跡盾形埴輪



和泉黄金塚古墳革盾

関連資料

引用文献
今尾文昭　1988「行燈山古墳銅板と大型仿製鏡」『同志社大学考古学シリーズⅣ　考古学と技術』同刊行会　pp. 173–1863
加藤一郎　2013『津堂城山古墳出土の不明銅製品について』『津堂城山古墳』藤井寺市文化財報告第 33 集　pp. 296–301
樋口清之　1927「崇神天皇陵發見と傳ふる青銅板」『考古學研究』第二年第一号　考古學研究會　pp. 37–41
関連文献
末永雅雄　1961「崇神天皇陵」『日本の古墳』朝日新聞社　pp. 25–26
高橋健自　1901「崇神陵発見の金属板」『考古界』第 1 篇第 6 號　考古學會　pp.331–334
橋本達也　1999.4「盾の系譜」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室　pp. 471–486
橋本達也　2001「弥生・古墳時代における盾の系譜」『季刊考古学』第 76 号　雄山閣出版　pp. 48–51